



「共助」 私の地域は、私たちが守る。

いつ起こるか予測できない大災害。電気や水道などのライフラインが寸断され、生活することが困難となるほどの災害時には、行政の機能「公助」も著しく低下する可能性が非常に高くなります。その被害が甚大になればなるほど、一人ひとりへの助けが必要となります。6月1日号では、防災特集前編として「自助」について特集し、私たちが今日から取り組める減災方法を紹介しました。

しかし、個人でできることにも限りがあります。大災害発生後に生命の確保や生活の維持のために必要となるのは「助け合い」。私たちの地域は私たちが守る「共助」の精神は、1人でも多くの命を救うために最も大切な考え方といえます。

熊本地震では、2次災害等への不安や長引く避難所生活での不満など、心的ストレスに身体的疲労が重なるなか、避難者どうしで互いに思いやり、助け合いながら避難所の運営を行ったところがあります。

地域住民が食材を持ち寄って共有したり、安否確認のためお互いに声掛けをして見守りを行うことが行政にとっても市民にとっても大きな助けとなりました。

手を携え ともに乗り越える

今回の特集では、共助とは何かを考えるため、積極的に防災活動を行っている地域の取り組みを紹介します。そこには、地域の絆を深め、手を携えて災害を乗り越えていきたいと考える人たちの姿がありました。

「誰かに頼るのではなく自分たちの力でやらなければ、効果的な防災活動はできない」。今回は「共助」について学び、より災害に強い地域づくりについて特集し、それぞれの地域での取り組みを紹介します。

自分たちでやる！

避難所開設訓練

こほく地域づくり協議会

【実施の経緯】

こほく地域づくり協議会理事長 松山久夫さんの生活安全部会では、地域内13自治会において防災推進委員を任命し、住民自らが行う「災害に強いまちづくり」について検討を重ね、実践的で効果的な防災訓練に取り組むことになりました。これまでの訓練は、避難所へ集まるだけの形式的なものという意見が、従来の訓練方式や考え方を大



こほく地域づくり協議会

(右から) 角川 茂孝さん(会長)
廣部 恒雄さん(部会長)
福本 雅文さん(副部会長)
角川 宏美さん(地域活力プランナー)

きく変えるきっかけでした。

「行政まかせの防災訓練では、住民の意識を高めることはできない。住民主体で行うことによってこそ効果が得られる」という強い信念のもと、住民間での助け合い意識が最も必要となる「避難所開設」の訓練を行うことにしました。今年で4回目を迎えます。

この訓練で目指すのは次の点です。

- 住民の防災意識を高める
- 避難所の開設と運営を知る
- 継続により、身体で覚える

地域住民に求めることは、形式的な役割分担にとらわれず、現場で判断できる力を養い、誰でも避難所を運営できる姿で、訓練ごとに課題を整理し、実践的なマニュアルとしてまとめたいです。

前回よりも更に効果的な訓練となるよう、新たな取り組みも交えるなど、常に意欲的に取り組んでいます。今のところ自治会間の温度差を埋めることが一番の課題となっています。こほく地協のメンバーは、100年後にも続く訓練とすることを意識し、地域が一丸となって、着実に歩みを進めることを重視して取り組んでいます。

【実施の準備】マニュアルの作成

マニュアルの中身として必要な「指定避難所設置図」や「開設手順」の作成をはじめ、必要用品の調達方法、避難所の収容人数の把握、そして特に混乱が予想される被災者受入方法等を中心に検討し、マニュアルを作成しました。中でも最も重視したのが、**簡単に避難所開設できる**ようにすること。「役割分担を決めても、実際の災害時には誰がいつ避難所へ来るかわからない」という現実を踏まえ、「マニュアルを見れば、誰でも避難所運営ができるようにしたい」という強い思いがあります。

また、避難所のどこに何があるか、視覚的にわかるようにするため、表示板を製作。素材は水や火に強く耐久性があるテント生地を採用しました。避難所設置図には、滞在スペース・通路・トイレ・更衣室・対策本部・掲示板など、必要な配置情報を記載しています。

避難所開設マニュアルの主な内容

- 避難所開設の手順
- 学区内の防災組織と自治会館一覧表
- 避難所設置図
- 防災倉庫保管資機材一覧表
- 名簿等の様式(避難者受付カード・自治会別避難者集計表・安否確認カードなど)
- 避難所の運営について



イラストでわかりやすい表示板
文字を採り、色をわけて、別々の表示板